Ⅳ　まとめ

まず、SD11から出土した懸仏について補足した後に、これまで述べた調査概要を踏まえた上で、若干の所見を加えて今年度調査のまとめにかえる。

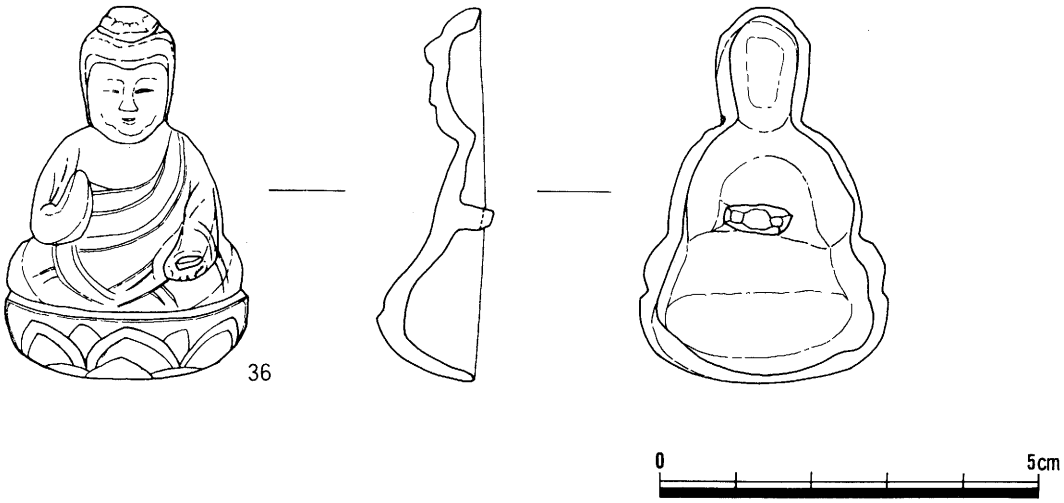
1　懸仏について

そもそも「懸仏」という名称は、その吊り懸けられる形から明治時代以降につけられたもので、本来は「御正体（みしょうたい）」と呼ばれ、鏡の中に仏像や神像などをあらわして、仏堂や社殿に吊り懸けて礼拝の対象とされたものである。その初現は平安時代前半に遡り、天台系密教の教理によってうちたてられた神仏習合、すなわち本地垂迹説（ほんちすいじゃくせつ）の思想の定着とともに盛行するものとなった。創始段階のものは、古くから御神体として神社に祀られていた鏡の鏡面に仏像や神像を朱墨で描いたり、線刻して表出するもので「鏡像（きょうぞう）」と呼称される。その後、次第に鏡板に半肉彫りや鋳胴製の尊像を貼り付け、吊懸金具を備える形へと推移して行く。この尊像を立体的に表現したものを「懸仏」と称する。

鎌倉時代以後、豪族や庶民の宗教活動が高まるにつれ、懸仏の製作が盛んとなり、一定の製作形式が整って行く。鏡に変わって銅製の円板に鍍金を施したものが主体となり、その表面に槌出しや鋲留めなどの手法によって半肉状のいわゆるレリーフで仏像を表出し、より精巧な表現を行うものへと発展する。さらに室町時代前半にはその製作技術は完成段階を迎える。尊像は円板とは別に製作され、厚手の鋳・鍛造品を柄・楔で円板と接合する手法が用いられ、より立体的で写実的なものとなった。また珠文・花座を装飾したり、花瓶・圏を配置するようになる。

しかし、この頃を境にしてその製作技術は衰退し始め、尊像は省略・粗雑化へと向かう。尊像そのものが薄手になり、口・眼・経衣が線刻のみで表現されるようになり、また、木造や瓦造のものも製作される。そして室町時代後期から江戸時代にかけて、懸仏は広く普及し、村々の小さな祠や、家々の氏神にも祀られるようになり、尊像も観音菩薩・阿弥陀如来・薬師如来などの仏像以外に、八幡神や民間信仰の神々、その土地土着の神々などを懸仏のかたちで製作した鋳胴・鋳鉄製のものが多く見られるようになる。やがて明治に至り、維新政府によって発せられた神仏分離令のもと吹き荒れる廃仏毀釈のなかで、懸仏の多くは取り除かれ信仰の表舞台から姿を消して行くこととなった。

県内に残る鏡像・懸仏の実情は、これまで詳細な調査例が無いため判然としないものの、廃仏毀釈を免れ寺社などに伝世するものは相当数あるものと思われる。しかし、発掘調査によって地中から発見されたものは立山信仰に関連する芦峅寺室堂遺跡・虚空蔵窟などで出土した数点が知られているのみである。その意味でも、今回八塚Ｃ遺跡で出



第８図　遺物実測図（Ｓ＝１／１）

土した当懸仏は貴重な資料と言える。先述した製作手法や造形の変遷からこの懸仏の製作年代を推定すると、室町時代後半代（14世紀後半）の所産と考えられる。一方で、出土した中世土師器皿を基準として導かれる遺構の帰属年代は、15世紀後半～16世紀前半であり、百年余の時期差が認められる。このことから、当該懸仏は少なくともその間は調査区周辺に所在したと推定される仏堂・社殿あるいは祠等に祀られ伝世していたと考えることができる。

2　調査の所見

調査当初は、地元に残る伝承や試掘調査結果から、中世後期に所在したとされる寺社に関わる遺構・遺物の発見が期待されたが、今回の調査対象地が遺跡範囲の外縁部に当たることに加え、予測以上に後世の攪乱の影響が著しく遺構・遺物ともに遺存状況が不良であったため、当遺跡の性格を解明するまでには至らなかった。

しかし、積極的に評価すれば、先述した懸仏の出土は周辺に何らかの宗教施設が存在したことを裏付ける根拠のひとつであり、また、井戸に投棄されていた瓦器製の火鉢を仏具の火舎と見なせば、その可能性はより高まる。さらに、その存在を肯定した場合、懸仏が出土したSD11やSD35などは区画溝と考えられる状況にあることから、これらの溝はその境内域を区画するものと考えることができよう。

また、検出された建物・井戸なども、出土した中世土師器皿の年代から15世紀後半～16世紀前半代に営まれたと捉えることができる。その宗教施設とどのように関わるものか明らかではないが、偶然にもかつて当地に所在した寺社跡が上杉謙信の兵火で消失したとの伝承を裏付けるが如く時期的に合致するため、非常に興味深い結果となった。

試掘調査結果では、次年度の調査予定地となる事業計画地北東端部域に、今年度調査区とは様相を異にする遺構密度が濃密な一帯があることが判明している。今後、その区域の調査が進めば当遺跡の性格・内容を解明する大きな手がかりを得るものと思われる。よって、次年度の調査成果をもって改めて検討を加えたい。　（島田）

引用・参考文献

イ　池野正男　1987「Ⅲ 調査概要 1 辻遺跡（5）弥生・古墳時代の遺物」『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』立山町教育委員会

石川県立歴史博物館　1987『懸仏への祈り』

岩手県立博物館　1983『岩手の懸仏』

ウ　上野　章・押川恵子　1991『井口城跡』井口村教育委員会

エ　越前慎子　1996「第Ⅱ章 遺物　2出土遺物 C中近世の土器・陶磁器」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

オ　大島町　1989『大島町史』大島町教育委員会編

大島町教育委員会　1991『富山県大島町荒畑遺跡発掘調査概要』大島町教育委員会

カ　河西健二　1994「Ⅷ研究レポート 5竪穴状土抗」『埋蔵文化財年報（5）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

サ　笹間良彦　1992『資料・日本歴史図録』柏書房株式会社

シ　下平博行　1988「第Ⅳ章 遺物　第1節 仏像及び仏具」『白山山頂学術調査報告』國學院大學考古学資料館 白山山頂学術調査団

タ　立山町教育委員会　1994『芦峅寺室堂遺跡－立山信仰の考古学的研究－』

ト　東京国立博物館　1990「鏡像と懸仏」『日本の美術』第284号

富山県教育委員会　1970『立山文化遺跡調査報告書』

富山県　1984『土地分類基本調査　富山』富山県農地林務部ほ場整備課編

富山県立山博物館　1994『立山信仰－祈りと願い』

ホ　北陸中世土器研究会　1988『北陸中世土器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』

ユ　湯尻修平　1988「第6章 第3次調査の遺物・第7章まとめ」『白江梯川遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

ヨ　吉岡康暢　1994「第二章 珠洲系陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』